

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第311集

比企郡玉川村

伊勢の台遺跡

県道玉川坂戸線建設工事事業関係埋蔵文化財発掘調査報告

2005

埼玉県

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

首都圏に位置し、全国第5位の700万県民を擁する埼玉県は、人口の増加に伴い、県民の生活圏が拡大し、産業活動も広域化しています。これらに対応するため、埼玉県では、交通の特性に応じた体系的な道路網の整備を行っています。

県道については、広域的あるいは地域間の交流を促進するための道づくりを進めているところです。県道玉川坂戸線の建設事業も、こうした事業の一環であります。

建設事業地のある比企郡玉川村は、外秩父山地の東麓にあり、緑豊かな自然にあふれた景勝の地でもあります。年々市街化が進展し、交通量の増加と相まって、県道が飽和状態に近づいておりました。そこで、交通の安全性と利便性を確保するため、県道の拡幅工事が計画されることになりました。

工事予定地内には、伊勢の台遺跡が広がっていることが知られておりました。道路建設計画と埋蔵文化財の取扱いについては、関係機関が慎重に協議を重ねましたが、やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなりました。発掘調査は、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整により、埼玉県県土整備部道路街路課の委託を受け、当事業団が実施しました。

調査の結果、伊勢の台遺跡からは、縄文時代の土壌が多数発見され、縄文時代中期～後期にかけての土器・石器などが出土しました。

本書はこれら発掘調査の成果をまとめたものであります。埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また、普及・啓発および各教育機関の参考資料として広く活用いただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力をいただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまで、御協力いただきました埼玉県県土整備部道路街路課、東松山県土整備事務所、玉川村教育委員会並びに地元関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

平成17年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 福田 陽 充

例言

1. 本書は、比企郡玉川村に所在する伊勢の台遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

伊勢の台遺跡(略号 ISNDI No41-019)
比企郡玉川村大字玉川字伊勢の台1116-1他
平成15年5月28日付け教文第2-133号
3. 発掘調査は、県道玉川坂戸線建設工事事業に伴う記録保存のための事前調査であり、埼玉県教育庁生涯学習課文化財保護課が調整し、埼玉県県土整備部道路街路課の委託を受けて、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 発掘調査期間と調査担当者は、以下のとおりである。

平成15年2月12日～平成15年3月27日
調査担当者 鈴木孝之 安生素明
5. 報告書作成事業は、平成17年2月18日から平成17年3月25日まで栗岡 潤が担当し実施した。

なお発掘調査整理作業の組織は第1章第3項に示したとおりである。
6. 遺跡の基準点測量は、㈱東京航業研究所に委託した。
7. 掲載した遺構写真は、各調査担当者が、遺物写真は栗岡が撮影した。
8. 本報告書の出土品整理・図版の作成は栗岡が行った。
9. 本書の執筆・編集は栗岡が行い、第1章-1を埼玉県教育庁生涯学習部文化財保護課が、縄文時代の遺物については、渡辺清志が行った。
10. 本書にかかる資料は、平成17年度以降、埼玉県埋蔵文化財センターが管理・保管する。
11. 発掘調査から報告書の刊行まで下記の方々にご教示、ご協力を賜った。記して謝意を表します。

玉川村教育委員会 石川安司(敬称略)

凡例

1. 伊勢の台遺跡におけるX・Yの数値は、国土標準平面直角座標第Ⅷ系(原点北緯36度00分00秒、東経139度50分00秒)に基づく座標値を示す。また、各挿図における方位はすべて座標北を示す。
2. 遺跡におけるグリッドの設定は、国土標準平面直角座標に基づき、10m×10m方眼を基本グリッドとしている。
3. 伊勢の台遺跡におけるグリッドの名称は、北西抗を基準として、南北方向は北から順にA・B・C…とアルファベットを付し、東西方向は西から1・2・3…と算用数字を付し、A-1グリッド等の名称を付けた。
4. 遺構番号は、原則として調査時に付した遺構番号を掲載している。
5. 本報告書における本文・挿図・表に示す遺構の略号は以下のとおりである。

土壌：SK 溝跡：SD ビット：P
6. 遺構図及び実測図の縮尺は原則として以下のとおりであり、挿図中に縮尺率とスケールを示した。

遺構 全体図 1/200
溝跡・ビット 1/80・1/60
土壌 1/60
遺物 石器 1/3
縄文土器・拓影図 1/4・1/3
7. 遺構断面図に表記した水準値は、海拔標高を示しており、単位はmである。
8. 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の1/25,000の地形図を利用した。
9. 本書に使用した引用・参考文献は、巻末にその一覧表を記載した。

目次

序	III 遺跡の概要	6
例言	IV 遺構と遺物	9
凡例	1. 土壌	9
目次	2. ビット	10
I 発掘調査の概要	3. 溝跡	13
1. 発掘調査に至る経過	4. 性格不明遺構	13
2. 発掘調査と報告書作成の経過	5. 出土遺物	19
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	V 調査のまとめ	26
II 遺跡の立地と環境	写真図版	

挿図目次

第1図 埼玉県の地形	3	第8図 ビット・溝跡(3)	14
第2図 周辺の遺跡	4	第9図 ビット・溝跡(4)	15
第3図 遺跡周辺の地形図	7	第10図 ビット・溝跡(5)	16
第4図 伊勢の台遺跡調査区全測	8	第11図 第1号性格不明遺構	17
第5図 土壌	11	第12図 遺構出土縄文土器	20
第6図 ビット・溝跡(1)	12	第13図 出土石器実測図	22
第7図 ビット・溝跡(2)	13	第14図 グリッド出土縄文土器	25

図版目次

図版1 調査区全景(北から)	第1号溝跡
調査区全景(南から)	図版3 第1号・4号土壌出土土器
図版2 調査区北端全景	第6号土壌出土土器
調査区南端全景	図版4 第1号性格不明遺構出土土器
C-2・D-3グリッド全景	C2-P2・P23出土土器
第1号土壌	図版5 グリッド出土土器(第14図1~9)
第2号土壌・D3-P15	グリッド出土土器(第14図10~17)
第4号土壌	図版6 グリッド出土土器(第14図18~25)
第6号土壌	出土石器(第13図)

I 発掘調査の概要

1. 調査に至る経過

埼玉県は多様化する県民の生活圏の拡大への対応や、高度化する産業活動の円滑化などを図るため、体系的な道路網整備を行っているところである。特に、県内地域間の連携を高めるために東西方向の県道の強化が図られている。これらの構想のもと、県道玉川坂戸線建設事業が計画された。

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課では、このような施策の推進に伴う文化財の保護について、従前より関係部局との事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

本事業にかかる埋蔵文化財の所在および取扱いについては、平成13年7月13日付け道街第289号で、道路街路課長より文化財保護課長あて照会があった。

文化財保護課では確認調査を実施し、その結果をもとに、平成14年11月25日付け教文第1167号で、伊勢の台遺跡の取扱いについて次のように回答した。

1 埋蔵文化財の所在

工事予定地には以下の埋蔵文化財が所在します。

名称(No)	種別	時代	所在地
伊勢の台遺跡 (No41-019)	集落跡	縄文 平安	玉川村大字玉川 字伊勢の台1116-1他

2 取扱いについて

上記の埋蔵文化財包蔵地は、現状保存することが望ましいが、事業計画上やむを得ず現状を変更する場合は、事前に文化財保護法第57条の3の規定に基づく発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施すること。

発掘調査については、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施機関としてあたることとし、事業団、東松山県土整備事務所、文化財保護課の三者により調査方法、期間、経費などの問題を中心に協議が行われた。

その結果、調査は平成15年2月12日から平成15年3月27日まで実施した。

なお、文化財保護法第57条の3の規定による埋蔵文化財発掘通知が埼玉県知事土屋義彦から平成15年3月27日付け道街第1028号で提出され、それに対する保護上必要な勧告は平成15年5月28日付け教文第3-1232号で行った。また、第57条1項の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。

発掘調査の届出に対する指示通知番号は次のとおりである。

平成15年5月28日付け 教文第2-133号

(文化財保護課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

伊勢の台遺跡の発掘調査は、平成15年2月12日から平成15年3月27日の期間で行った。

調査は、平成15年1月下旬に事務手続き、2月中旬に事務所設置を行い、重機による表土除去作業を開始した。

2月中旬から基準点測量を実施し、人力で遺構確認作業を行い、調査を開始した。順次土層断面図、平面図等の作成、写真撮影を3月中旬まで行った。

調査の結果、検出した遺構は、土壌12基、溝跡1条、ピット130基、不明遺構1基であった。

すべての調査終了後、重機による埋め戻し作業・事務所等の撤去作業を行い、3月27日に調査を終了した。

(2) 整理・報告書の作成

整理・報告書作成事業は、平成17年2月18日から平成17年3月25日まで実施した。

2月中旬から、遺物の接合・復元を行い、同時に遺構平面・断面図の修正を行い、第2原因の作成を行った。復元の終了した遺物から、実測を開始した。

遺構図面については、イラストレーターによるデジタルトレースを行った。

遺構・遺物のトレース作業は上旬で終了し、版組作業をおこなった。同時に遺物の写真撮影を行い、写真図版の作成、原稿執筆に取り掛かった。

原稿執筆終了後、編集作業を行い、3月中旬に印刷会社を決定し、入稿した。3回の校正を経て、平成17年3月25日に報告書を刊行した。

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査

平成14年度

理事長	桐川卓雄
副理事長	飯塚誠一郎
常務理事兼管理部長	大館 健
管理部	
管理幹	持田紀男
主任	江田和美
主任	長滝美智子
主任	福田昭美
主任	腰塚雄二
主任	菊池 久
調査部	
調査部長	高橋一夫
調査部副部長	坂野和信
主席調査員(調査第1担当)	昼間孝志
統括調査員	鈴木孝之
調査員	安生素明

(2) 整理・報告書作成事業

平成16年度

理事長	福田陽充
副理事長	飯塚誠一郎
常務理事兼管理部長	中村英樹
管理部	
管理部副部長	村田健二
主席	田中由夫
主任	長滝美智子
主任	福田昭美
主任	菊池 久
主任	海老名健
主任	石原良子
調査部	
調査部長	宮崎朝雄
調査部副部長	坂野和信
主席調査員(資料整理担当)	磯崎 一
主任調査員	栗岡 潤

II 遺跡の立地と環境

伊勢の台遺跡は、埼玉県比企郡玉川村大字玉川字伊勢の台1116-1他に所在する。

比企郡玉川村は、埼玉県のほぼ中央部に位置し、村の大半は、入間川水系に属する都幾川、雀川、槻川とその支流によって形成された谷の両岸に集落が形成されている。地勢的には、大きく分けて西側が外秩父山地、東側が台地と丘陵となっている。

秩父盆地と関東平野を隔する外秩父山地は、その東側は、加治・比企丘陵へと連なっている。山地と丘陵は、八王子—高崎構造線が境界線となっている。この構造線をなぞるように、現在JR八高線が通っている。

伊勢の台遺跡は、JR八高線明覚駅の北東約1kmの都幾川右岸にあり、隣接する鳩山町から広がる南比企丘陵の北端に立地する。調査地点は、都幾川からやや奥まった小丘陵の北側斜面に位置している。

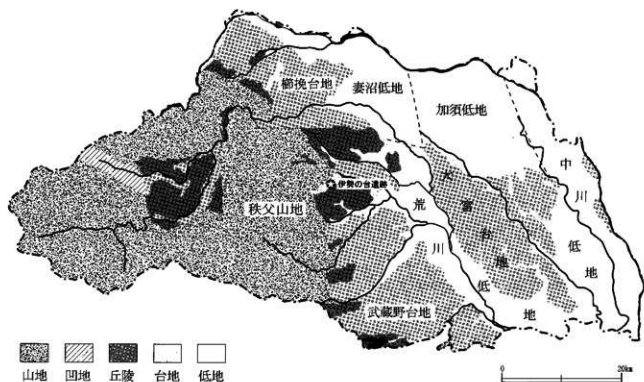
遺跡付近の標高は、70m前後である。

伊勢の台遺跡の北側では、都幾川とその支流である雀川が合流し、この付近では、都幾川両端に低地帯の広がりが見られ、都幾川の流れとともに北東方向へ広がっている。

以下、遺跡の分布の概要について述べる。玉川村では、旧石器時代から、中近世までの遺跡が確認されているが、伊勢の台遺跡からは縄文時代の遺構・遺物が検出されており、ここでは、本遺跡と最も関係の深い縄文時代を中心に概観したい。

玉川村内では、旧石器時代の遺物は、嵐山町との境界にある跡新田遺跡（石川1995）でナイフ形石器が出土しているのみで、現段階では、他に出土例はない。

縄文時代の遺跡は、伊勢の台遺跡を含め、玉川村周辺では、早期前葉から後期中葉までの遺跡が確認



第1図 埼玉県の地形



遺跡名一覧

1. 伊勢の台遺跡
2. 狐塚遺跡
3. 日野原遺跡
4. 原遺跡
5. 地家遺跡
6. 根際遺跡
7. 玉川小学校裏遺跡
8. 江光台遺跡
9. 八幡遺跡
10. 北山遺跡
11. 小松遺跡
12. 笹山遺跡
13. 寒風遺跡
14. 檜沢東遺跡
15. 東落合遺跡
16. 細原遺跡
17. 小倉遺跡
18. 山王山遺跡
19. 山根遺跡

第2図 周辺の遺跡

されている。これらの遺跡は、以下の地点に分布の集中がみられる。

- 1 横川流域の玉川村・嵐山町境界付近の嵐山渓谷周辺。
- 2 本遺跡を含む都幾川兩岸の台地上。
- 3 本遺跡からは、都幾川・雀川対岸にあたる、物見山から春日山にかけての山地。

これらは概ね3箇所、都幾川兩岸をそれぞれ別に考えれば4箇所に遺跡の集中が認められる。

以下、時期別に分布の傾向を述べる。

早期

縄文時代早期の遺跡は、都幾川右岸の日野原遺跡(石岡他1982)、左岸では地家遺跡(石川1996)、春日山・物見山付近の山地部では笹山・寒風・檜沢東・北山遺跡などから、撚糸文系・押型文系・沈線文系土器が出土している。

本遺跡対岸の根原遺跡では、早期の炉穴群が検出されている(黒坂1998)。

前期

前期の遺跡は、前出の遺跡では、羽状縄文系・竹管文系の土器が出土し、特に北山・寒風遺跡では、黒浜期の住居跡が検出され、檜沢東、寒風遺跡(植木1995、細田・宮崎1996)では、諸磯期の土壌や住居跡が検出されている。

また、前期になって、嵐山渓谷周辺に遺跡が集中する。玉川村山王山・小倉遺跡(石川1993)で黒浜期の住居跡、嵐山町山根遺跡(梅沢他1983)で黒浜～諸磯期の住居跡が調査されている。

前期末～中期初頭

玉川村では、一般的には検出例の少ない、前期末から中期初頭の遺構・遺物が検出した遺跡も有る。

檜沢遺跡で諸磯C期、寒風遺跡・玉川中学校裏遺跡で十三菩提及び五領ヶ台式土器が出土している。

中期

中期では、都幾川兩岸の台地上に遺跡が集中する傾向がある。都幾川右岸では、伊勢の台遺跡、狐塚

遺跡(小野1991)・原遺跡(小野1989)・日野原遺跡で加曾利E期の遺構・遺物が検出されている。これらの遺跡では、概ね後期まで存続し、遺跡の継続性が認められる。

また、本遺跡から都幾川上流の江光山遺跡(梅沢1980)では、中期後半の現状に分布する土壌群が検出された。

都幾川左岸では、地家遺跡で勝坂期～加曾利E期にかけての住居跡が調査されている(小野1990a・石川1996)。

後期以降

後期以降の遺跡は、前出の狐塚・原・日野原遺跡で後期の遺構が検出された他、山麓部の寒風遺跡で堀之内期から加曾利B期の土器が出土した。また、後久保遺跡からは、採集品ではあるが、後期中葉に属すると考えられる山形土偶が出土した(塩野他1991)。

晩期の遺跡については、現段階では玉川村内では遺跡の分布は認められない。縄文時代後期を境に、遺跡の分布が極めて少なくなる。このことは、玉川村周辺のみならず、外秩父山地の東側に接する間台地、加治・高麗・比企の各丘陵においては同様の傾向が認められるようである。

縄文時代晩期以降は、笹山遺跡で古墳時代前期が、衆生ヶ谷戸遺跡(金子1982)で古墳時代中期の遺物が土壌中から出土した程度で、奈良・平安時代まで遺跡の分布は極端に少なくなる。

伊勢の台遺跡でも、過去の調査で、平安時代の住居跡が検出されている(塩野他1991)が、今回の調査では、奈良・平安時代の遺構・遺物は検出できなかった。

以上、縄文時代を中心に、遺跡の分布について述べたが、玉川村周辺部では、早・前期は都幾川左岸の山地部分に遺跡が集中し、次第に嵐山渓谷、都幾川兩岸の台地上へと遺跡の分布の中心が変わり、後期を最後に周辺から遺跡が極めて少なくなるという傾向があるようである。

Ⅲ 遺跡の概要

伊勢の台遺跡は、埼玉県比企郡玉川村大字玉川字伊勢の台1116番地他に所在し、JR八高線明覚駅の北東約1kmに位置する。

遺跡は、入間川水系の都幾川右岸にあり、隣接する鳩山町から広がる南比企丘陵の北端に立地する。

都幾川は、外秩父山地に源を発し、本遺跡北側付近で雀川と合流する。下流の嵐山町菅谷館跡付近で槻川と合流し、さらに東松山市高坂付近を東に流れ、東松山市・坂戸市・川島町が接する地点で越辺川と合流している。

遺跡付近では、都幾川両端に低地帯の広がりが見られ、都幾川の流れとともに北東方向へ広がっている。

調査地点は、都幾川からやや奥まった台地の北側斜面に位置している。遺跡付近の標高は70m前後で、都幾川との高低差は約10m前後である。

伊勢の台遺跡の広がり、都幾川右岸の台地上を、都幾川の流れに沿うように南西から北東方向へ広がりをしている。

現在の県道大野・東松山線にほぼ沿う形となっている。遺跡の範囲は長さ500m、幅は最大で300mほどとなっている。

今回の調査地点は、遺跡の南西端にあたり、都幾川には最も近い地点となっている。都幾川との距離は約150mである。

調査区は、幅3～7m、長さ50mの細長い調査区で、検出遺構の多くは調査区外へ展開していた。

調査の結果検出した遺構は、土壇12基、溝跡1条、ピット130基、不明遺構1基であった。

検出した土壇は、第1・4～6号土壇から縄文時代中期の土器が出土し、他の土壇も、覆土の観察の結果、縄文時代に属するものと判断した。

ピットは、調査区のほぼ全域にわたって検出され

たが、調査区の中央付近を境に、北側では時期不明の比較的浅いピットが、南側では縄文土器の出土するピットが検出されたが、明確な時期を明らかにすることはできなかった。特に、D-3グリッドを中心に、縄文土器を出土するピットが集中していた。しかし、ピット群の配置に規則性はなく、建物遺構に伴うものかどうかは判断できなかった。

溝跡は1条検出された。調査区の北側を、東西に横切る形で検出された。溝の両端は、調査区外に及ぶため、全容は明らかにできなかった。遺物は出土せず、時期は明らかにできなかった。都市計画図には、溝跡の位置に、畑の境界線が描かれており、近世以降の区画溝であった可能性も有る。

不明遺構は、東西11m、南北16mの範囲で約0.2m落ち込んでいた。縄文土器が出土し、当初は、堅穴住居跡を想定し調査を行ったが、形状が不整形で、炉跡や柱穴などの付属施設等が検出できなかったことから、不明遺構(SX)と呼称した。

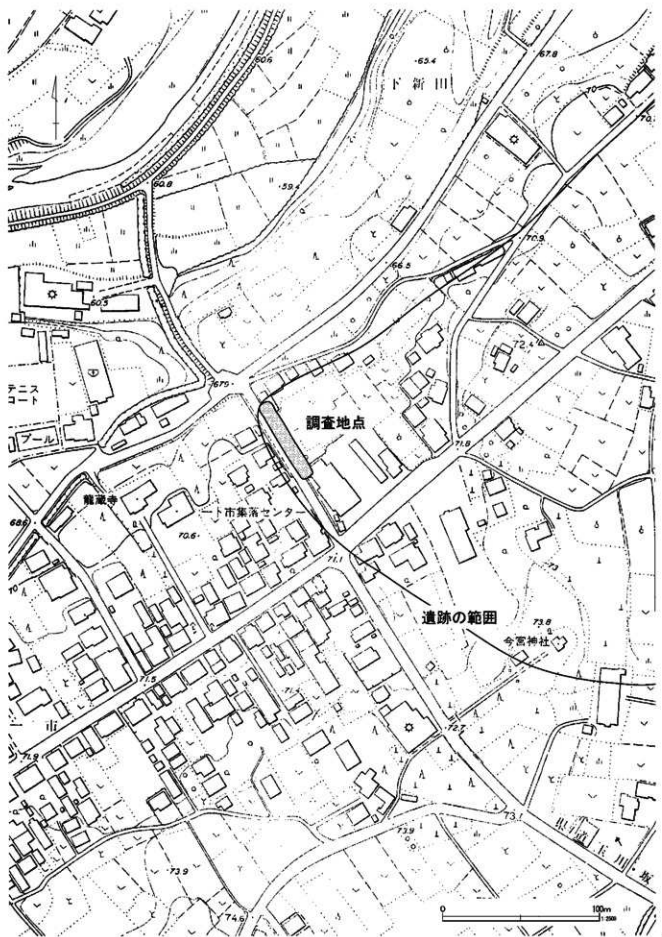
出土遺物は、縄文時代中期を中心とした土器片が、土壇・ピット・不明遺構・グリッドから出土した。

また、早期の条痕文系土器が僅かではあるがグリッドから出土した。

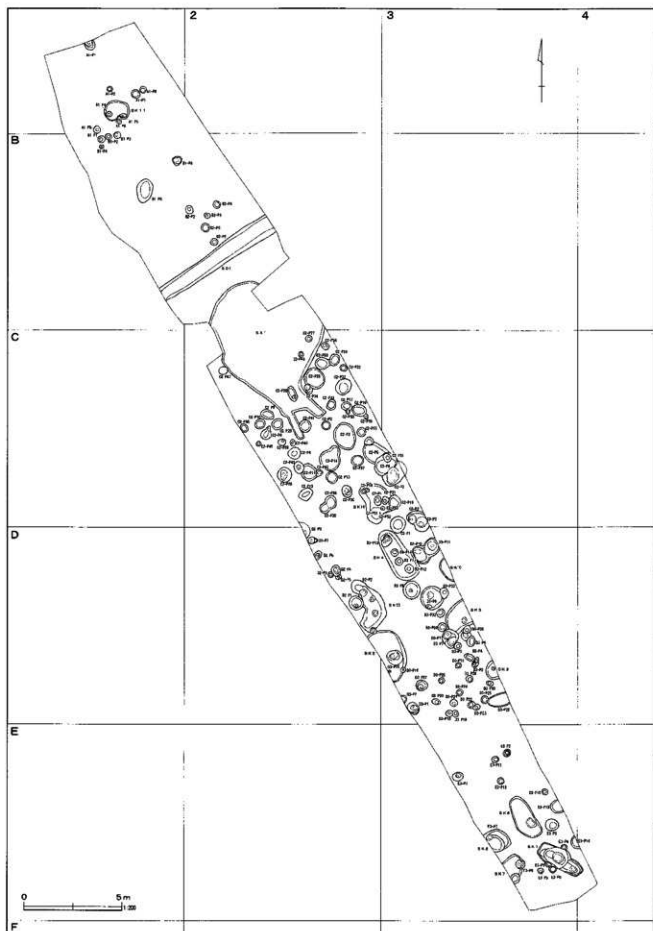
石器は、少数であるが、出土した。打製石斧・石皿・磨石で、石鏃等の小型石器は出土しなかった。

今回の伊勢の台遺跡の調査は、第4次調査であり、これまでの調査成果では、縄文時代・平安時代の遺構が検出されている。今回の調査では、縄文時代の土壇等が検出され、縄文早期・中期の土器が出土したが、堅穴住居・炉穴等の生活跡を検出することはできなかった。

今回の調査地点は、遺跡の範囲の南西端ということもあり、集落の中心は、今回調査地点よりも北東方向にあったものと考えられる。



第3図 遺跡周辺の地形図



第4図 伊勢の台遺跡調査区全測

IV 遺構と遺物

1. 土壌

土壌は、調査中14基に番号を付したが、調査あるいは整理段階で遺構ではないと判断したものがある。これらは欠番とし、遺構番号は調査段階のものをそのまま使用したため、番号に欠落がある。SK 14まで番号が付してあるが、実際に検出した遺構は12基である。

第1号土壌 (第5図)

E-3グリッドで検出した。平面の形状は隅の丸い長方形であった。規模は、長軸2.48m、短軸1.04m、確認面からの深さは0.52mであった。主軸方位はN-57°-Wであった。

遺物は、加曾利EⅢ式～EⅣ式にかけての上器片が出土した。図示可能な遺物は4点である(第12図)。

第2号土壌 (第5図)

D-3グリッドで検出した。平面の形状は楕円形と考えられるが、遺構の約半分が調査区外へ広がるため、全体の形状は明らかにできなかった。規模は、残存部分で長軸1.86m、短軸1.40m、深さは0.22mであった。主軸方位は、ほぼ北を向いていた。

底面でD3-P15を検出したが、覆土の状態から、土壌と同時に機能していたものと思われる。

遺物は出土しなかった。

第3号土壌 (第5図)

D-3グリッドで検出した。平面の形状は、円形または楕円形と考えられるが、一部が調査区外へ広がっていた。規模は、直径0.86m、深さは0.18mであった。主軸方位は、N-25°-Wであった。

底面は概ね平坦で、小穴を1基検出した。

遺物は出土しなかった。

第4号土壌 (第5図)

D-3グリッドで検出した。平面の形状は楕円形で、長軸2.84m、短軸1.38m、深さ0.30mであった。主軸方位は、N-32°-Wであった。

底面でピットを4基検出したが、SK4との重複関係は明らかにできなかった。

遺物は、縄文時代中期の加曾利EⅡ式～加曾利EⅣ式の土器が出土した。このうち図示可能な遺物は2点であった(第12図)。

第5号土壌 (第5図)

D-3グリッドで検出した。平面の形状は楕円形と思われるが、一部が調査区外へ広がっていた。規模は、長軸は残存部分で1.36m、短軸1.24m、深さ0.24mであった。主軸方位はN-64°-Eであった。

遺物は、縄文土器の小片が出土したが、図示可能な遺物はなかった。

第6号土壌 (第5図)

E-3グリッドで検出した。平面の形状は楕円形で、規模は、長軸2.32m、短軸1.08m、深さ0.22mであった。主軸方位は、N-33°-Wであった。底面は概ね平坦で、小穴を1基検出した。

遺物は、加曾利EⅢ式～加曾利EⅣ式の土器が出土した。このうち、図示可能な土器は4点であった(第12図)。また、打製石斧1点、磨石1点が出土した(第13図)。

第7号土壌 (第5図)

E-3グリッドで検出した。平面の形状は楕円形と思われるが、一部が調査区外へ広がっていた。規模は、長軸は残存部分で1.02m、短軸1.12m、深さ0.10mであった。主軸方位はN-34°-Eであった。

遺物は出土しなかった。

第8号土壌 (第5図)

E-3グリッドで検出した。平面の形状は楕円形と思われるが、一部が調査区外へ広がっていた。規模は、長軸は残存部分で1.02m、短軸1.10m、深さ0.32mであった。主軸方位はN-59°-Eであった。

遺物は出土しなかった。

第10号土壌 (第5図)

E-3グリッドで検出した。平面の形状は楕円形と思われるが、一部が調査区外へ広がっていた。規模は、径1.32m、深さ0.06mであった。主軸方位はN-26°-Wであった。

遺物は出土しなかった。

第11号土壌 (第5図)

A-1グリッドで検出した。平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.28m、短軸1.04m、深さ0.10mであった。主軸方位は、N-87°-Wであった。

遺物は出土しなかった。

第13号土壌 (第5図)

D-2・3グリッドで検出した。平面の形状はL字形であった。規模は、長軸2.50m、短軸1.52m、深さ0.16mであった。主軸方位は、N-40°-Wであった。底面に小穴を3基検出した。このうち最も深いものは、土壌底面から0.76mのものもあった。

遺物は出土しなかった。

第14号土壌 (第5図)

C-2グリッドで検出した。平面の形状は不整形で、規模は、長軸2.06m、短軸1.80m、深さ0.32mであった。主軸方位は、ほぼ北を向いていた。

第14号土壌は、C-2-P1・18・19・21・51～53と重複していた。重複関係は、全てのピットに壊されていた。遺物は出土しなかった。

2. ピット

ピットは、調査区内全域にわたって、多数検出された。遺構番号は、各グリッド別に番号を付し、C2-P1 (グリッド番号-遺構番号) といったように呼称した。

なお、ピットの平面の規模・深さ等の計測地については、18頁のピット計測表を参照されたい。

ピットは総数で130基検出した。ピットの分布は、概ね調査区内の以下の3箇所に集中する傾向が認められた。

- 1 調査区北部の第1号溝跡以北 (第6・7図)
- 2 第1号不明遺構以南の調査区中央部 (第8・9図)
- 3 調査区南端部 (第10図)

このうち、最も遺構が集中するのは、調査区中央部であった。

調査区北端部、南端部で検出したピットには、遺物が出土せず、時期が明らかにできなかった。

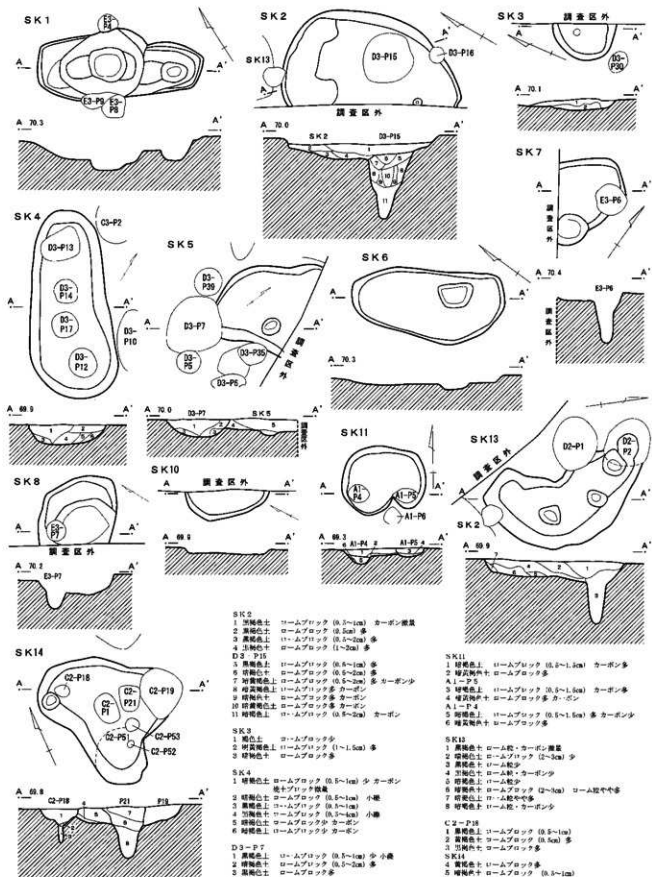
遺構が最も集中する調査区中央部については、遺物の出土、土壌との重複関係、土壌覆土との共通性から、概ね縄文時代に属する遺構であると判断した。

大半のピットは、深さ0.1m～0.3m前後の比較的浅いピットで構成されるが、C2-P1・7・19・31、C3-P2・3、D2-P1・6、D3-P8・11～13・15・17では、深さ0.7m～1.3mと深い。

また、このうちC2-P7、C3-P3では、土層断面で住痕跡が確認できた。これらのピットは、堅穴住居跡、掘立柱建物跡等の建物遺構の柱穴であった可能性が高いが、ピットの配列に規則性はなく、建物遺構の検出には至らなかった。

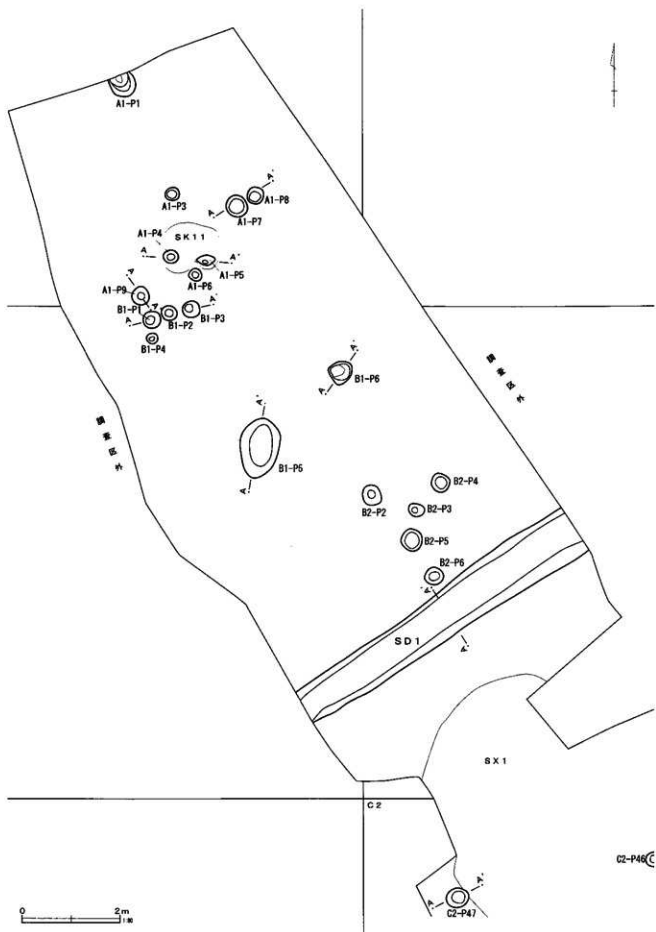
遺物は、C2-P2・5・6・16・23・24・25から縄文土器片が出土した。何れも小片が多く、図示可能な遺物は少なかったが、縄文時代中期の加曾利EⅢ式～加曾利EⅣ式にかけての遺物が出土した。

このうち、C2-P2・23から出土した縄文土器については、第12図16～22に図示した。

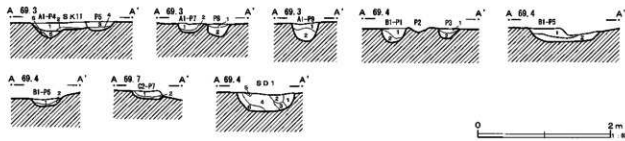


- SK 2
- 1 灰褐色土 ロームブロック (0.5~1cm) カーボン微量
 - 2 黒褐色土 ロームブロック (0.5cm) 多
 - 3 黒褐色土 11-ムブリック (0.5~1cm) 多
 - 4 土砂粘土 ロームブロック (1~2cm) 多
- D3-P15
- 1 黒褐色土 11-ムブリック (0.5~1cm) 多
 - 2 灰褐色土 ロームブロック (0.5~2cm) 多
 - 3 灰褐色土 ロームブロック (0.5~2cm) 多
 - 4 灰褐色土 ロームブロック (0.5~2cm) 多
 - 5 灰褐色土 ロームブロック (0.5~2cm) 多
 - 6 灰褐色土 ロームブロック (0.5~2cm) 多
 - 7 灰褐色土 ロームブロック (0.5~2cm) 多
 - 8 灰褐色土 ロームブロック (0.5~2cm) 多
 - 9 灰褐色土 ロームブロック (0.5~2cm) 多
 - 10 灰褐色土 ロームブロック (0.5~2cm) 多
 - 11 灰褐色土 11-ムブリック (0.5~1cm) カーボン
- SK 3
- 1 砂粘土 ロームブロック少
 - 2 灰褐色土 11-ムブリック (1~1.5cm) 多
 - 3 砂粘土 ロームブロック多
- SK 4
- 1 砂粘土 ロームブロック (0.5~1cm) 少
 - 2 砂粘土 ロームブロック (0.5~1cm) 少
 - 3 砂粘土 ロームブロック (0.5~1cm) 少
 - 4 砂粘土 ロームブロック (0.5~1cm) 少
 - 5 砂粘土 ロームブロック (0.5~1cm) 少
 - 6 砂粘土 ロームブロック (0.5~1cm) 少
 - 7 砂粘土 ロームブロック (0.5~1cm) 少
 - 8 砂粘土 ロームブロック (0.5~1cm) 少
 - 9 砂粘土 ロームブロック (0.5~1cm) 少
 - 10 砂粘土 ロームブロック (0.5~1cm) 少
 - 11 砂粘土 ロームブロック (0.5~1cm) 少
- D3-P7
- 1 灰褐色土 11-ムブリック (0.5~1cm) 少
 - 2 灰褐色土 11-ムブリック (0.5~2cm) 多
 - 3 灰褐色土 ロームブロック多
- SK 5
- 1 灰褐色土 ロームブロック多
 - 2 灰褐色土 ロームブロック多
- SK 6
- 1 灰褐色土 ロームブロック多
 - 2 灰褐色土 ロームブロック多
- SK 7
- 1 灰褐色土 ロームブロック多
 - 2 灰褐色土 ロームブロック多
- SK 8
- 1 灰褐色土 ロームブロック多
 - 2 灰褐色土 ロームブロック多
- SK 10
- 1 灰褐色土 ロームブロック多
 - 2 灰褐色土 ロームブロック多
- SK 11
- 1 砂粘土 11-ムブリック (0.5~1.5cm) カーボン多
 - 2 砂粘土 ロームブロック多
 - 3 砂粘土 11-ムブリック (0.5~1.5cm) カーボン多
 - 4 砂粘土 ロームブロック多
 - 5 砂粘土 11-ムブリック (0.5~1.5cm) 多
 - 6 砂粘土 11-ムブリック (0.5~1.5cm) 多
- SK 13
- 1 黒褐色土 ローム塊・カーボン微量
 - 2 砂粘土 ロームブロック (2~3cm) 少
 - 3 黒褐色土 ローム塊少
 - 4 砂粘土 ローム塊・カーボン少
 - 5 砂粘土 ローム塊少
 - 6 砂粘土 ローム塊・カーボン少
 - 7 砂粘土 ローム塊・カーボン少
 - 8 砂粘土 ローム塊・カーボン少
- C2-P18
- 1 黒褐色土 11-ムブリック (0.5~1cm)
 - 2 黒褐色土 11-ムブリック (0.5cm) 多
 - 3 砂粘土 ロームブロック多
- SK 14
- 1 灰褐色土 11-ムブリック多
 - 2 灰褐色土 11-ムブリック (0.5~1cm)
- C2-P21
- 1 灰褐色土 ロームブロック・砂土ブロック微量
 - 2 砂粘土 ロームブロック・カーボン

第5図 土壌



第6図 ビット・溝跡(1)



- SK11**
 1 暗褐色土 ロームブロック (0.5~1.5m) カーボン多
 2 暗褐色土 ロームブロック多
 A1-D5
 3 暗褐色土 ロームブロック (0.5~1.5m) カーボン多
 4 暗褐色土 ロームブロック多 カーボン
 A1-D4
 5 暗褐色土 ロームブロック (0.5~1.5m) 多カーボン多
 6 暗褐色土 ロームブロック多
- A1-D7**
 1 暗褐色土 ロームブロック 多カーボン少
 2 黒褐色土 ロームブロック 多小礫多
- A1-D8**
 1 暗褐色土 ロームブロック (0.5m) 少カーボン
 2 暗褐色土 ロームブロック 多小礫多

- A1-D9**
 1 暗褐色土 ロームブロック・カーボン
 2 暗褐色土 ロームブロック多カーボン
- B1-P1**
 1 黒褐色土 ロームブロック (0.5~2m)
 2 暗褐色土 ロームブロック (0.5~2m) 多
- B1-P2**
 1 黒褐色土 ロームブロック (0.5~2m) カーボン
 2 暗褐色土 ロームブロック多
- B1-P3**
 1 出砂土 ロームブロック (0.5m~) 少カーボン
 2 暗褐色土 ロームブロック (0.5~1m) 多

- B1-D6**
 1 暗褐色土 ロームブロック (0.5~1m) カーボン
 2 暗褐色土 ロームブロック多
- C2-P47**
 1 暗褐色土 ロームブロック (0.5m) シカーボン
 2 暗褐色土 ロームブロック (0.5~1m) 多
- SK11**
 1 暗褐色土 ロームブロック
 2 黒褐色土 ロームブロック (0.5~1m) カーボン
 3 暗褐色土 ロームブロック (0.5~2m) 多
 4 暗褐色土 ロームブロック (0.5~1m) シカーボン
 5 黒褐色土 ロームブロック 多
 6 暗褐色土 ロームブロック (0.5~1.5m) カーボン

第7図 ビット・溝跡 (2)

3. 溝跡

第1号溝跡 (第6図)

第1号溝跡は、調査区北部のB-1・2グリッドで検出した。溝跡は、調査区を横断するように検出され、遺構の両端は、調査区外へ広がっていたため、全体を明らかにすることはできなかった。

規模は、全長は、現状で6.6m、幅1.0m~1.1m、深さ0.45mであった。

溝底面は平坦で、立ち上がりは直線的ではなく、やや丸みを持って立ち上がっていた。

遺構覆土は、黒褐色土が主体で、粒径の粗いロームブロック・炭化物粒子 (径1.5cm~2.0cm) を多く含んでおり、人為的な埋め戻しと考えられる。覆土は主に南側からの堆積である。

遺物は、縄文土器片が数点出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。

遺構の時期は、明らかにできなかったが、縄文時代の遺構の覆土とは明らかに異なり、黒褐色土を主体とする覆土が堆積していた。

現代の1/2500都市計画図には、溝跡の位置に、畑の境界線が描かれており、近世以降の区画溝であった可能性も有る。

4. 性格不明遺構

第1号性格不明遺構 (第11図)

第1号性格不明遺構は、B・C-1・2グリッドで検出した。第1号溝跡の南側で検出した。遺構の北側の一部は調査区外へ及び、全体の形状は明らかにできなかった。

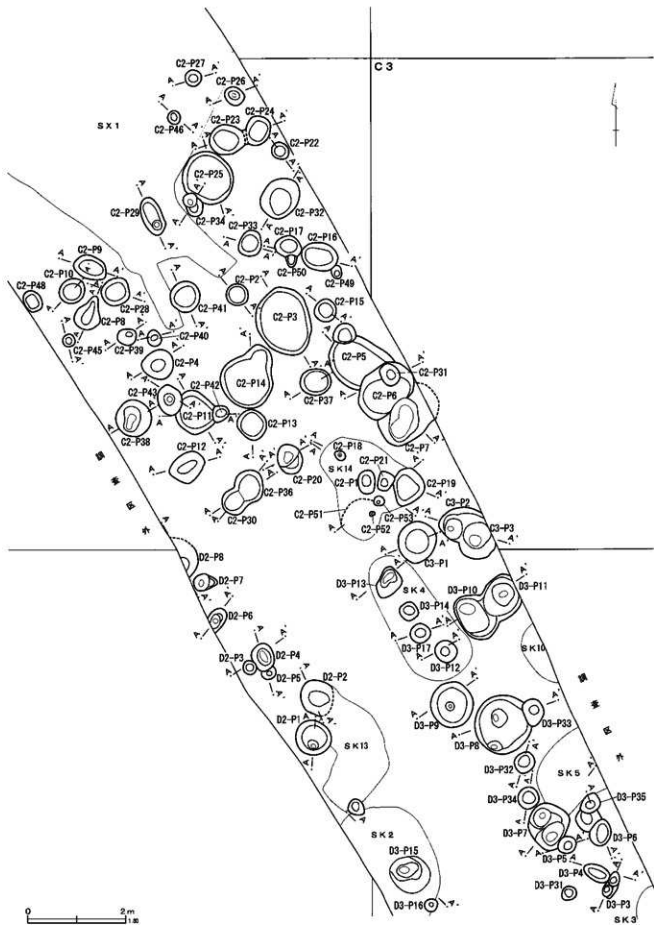
調査中は、遺構からは縄文土器が出土し、竪穴住居跡を想定して調査を行ったが、遺構平面の形状が不整系であり、炉跡や柱穴などの付属施設等が検出できなかったことから、性格不明遺構 (SX) と呼称した。

遺構の規模は、東西11m、南北16mの不整形で、深さ0.2mであった。

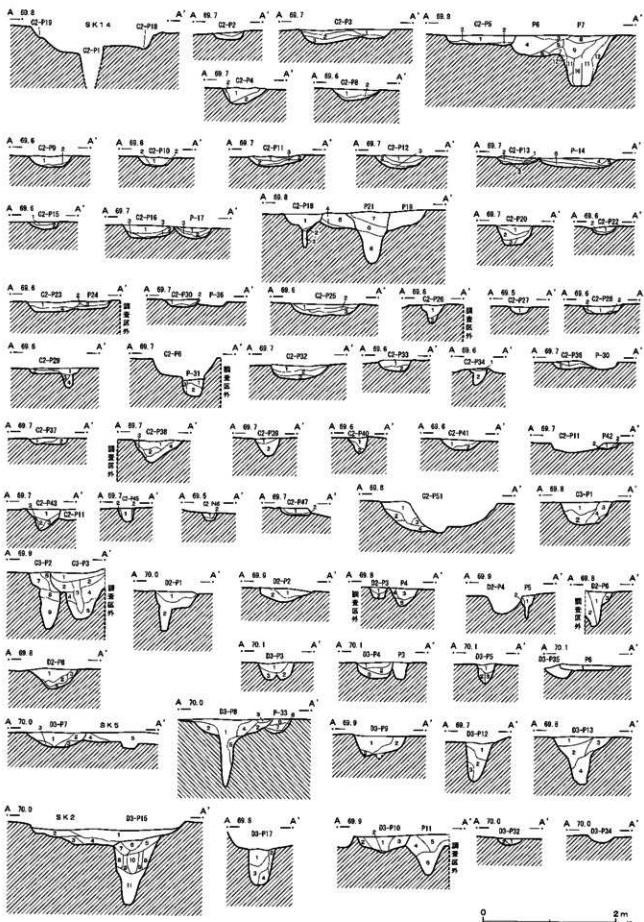
底面の形状は概ね平坦で、堆積土は、黒褐色土・暗褐色土を主体とし、ロームブロックを多く含み、炭化物を少量含んでいた。

また、本遺構底面を確認面とするビットを3基検出したが、本遺構に伴うかどうかは明らかにできなかったため、グリッドビットとして扱った。

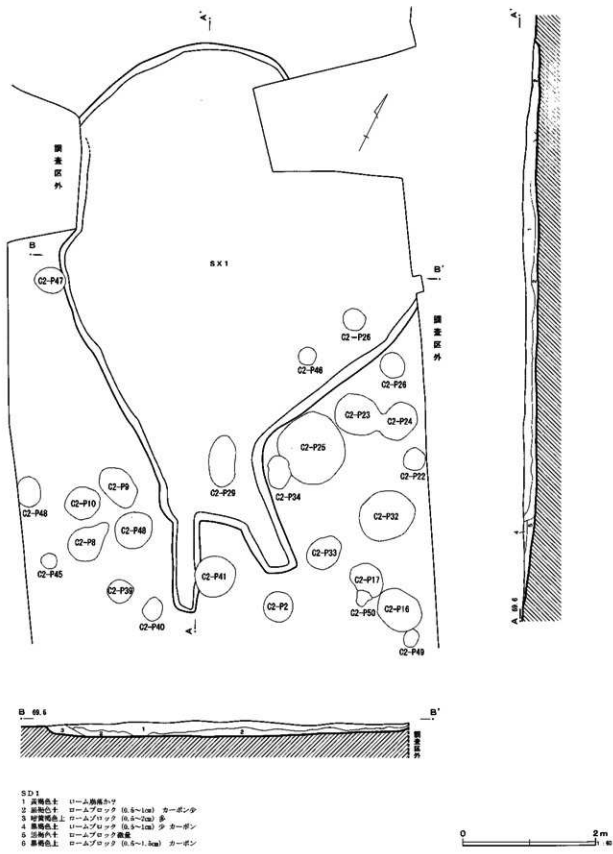
遺物は、縄文時代中期の加曾利EⅡ式~加曾利EⅢ式の土器片が6点出土した。このうち、図示可能な遺物は5点であった (第12図11~15)。



第8図 ビット・溝跡 (3)



第9図 ビット・溝跡 (4)



第11図 第1号性格不明遺構

ビット計測表

番号	位置	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	位置	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	位置	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
A1-P 1	A1	0.52	0.50	0.75	C2-P30	C2	0.57	0.50	0.11	D3-P16	D2	0.26		0.27
A1-P 3	A1	0.28		0.15	C2-P31	C2	0.46		0.32	D3-P17	D2	0.40		0.59
A1-P 4	A1	0.34	0.28	0.14	C2-P32	C2	0.87	0.28	0.22	D3-P18	D2	0.32		0.22
A1-P 5	A1	0.42	0.28	0.14	C2-P33	C2	0.54	0.28	0.18	D3-P19	D2	0.32		0.11
A1-P 6	A1	0.26		0.13	C2-P34	C2	0.50		0.28	D3-P20	D2	0.43	0.30	0.08
A1-P 7	A1	0.44		0.11	C2-P36	C2	0.74		0.12	D3-P21	D2	0.40		0.13
A1-P 8	A1	0.32		0.23	C2-P37	C2	0.64		0.10	D3-P22	D2	0.37		0.06
A1-P 9	A1	0.35		0.30	C2-P38	C2	0.73		0.35	D3-P23	D2	0.34	0.26	0.11
B1-P 1	B1	0.36		0.23	C2-P39	C2	0.40		0.29	D3-P24	D2	0.35		0.08
B1-P 2	B1	0.30		0.07	C2-P40	C2	0.36		0.28	D3-P25	D2	0.38		0.06
B1-P 3	B1	0.36		0.19	C2-P41	C2	0.64		0.18	D3-P26	D2	1.08	0.68	0.11
B1-P 4	B1	0.23		0.15	C2-P42	C2	0.33		0.11	D3-P27	D2	0.58		0.12
B1-P 5	B1	1.21	0.82	0.22	C2-P43	C2	0.52	0.82	0.33	D3-P28	D2	0.30		0.10
B1-P 6	B1	0.48		0.18	C2-P45	C2	0.25		0.22	D3-P29	D2	0.35		0.12
B2-P 2	B2	0.43		0.14	C2-P46	C2	0.28		0.14	D3-P30	D2	0.34	0.25	0.10
B2-P 3	B2	0.31	0.26	0.14	C2-P47	C2	0.45	0.26	0.10	D3-P31	D2	0.28		0.06
B2-P 4	B2	0.38		0.01	C2-P48	C2	0.45		0.09	D3-P32	D2	0.40		0.11
B2-P 5	B2	0.46		0.06	C2-P49	C2	0.28		0.24	D3-P33	D2	0.58	0.44	0.15
B2-P 6	B2	0.38		0.10	C2-P50	C2	0.24		0.12	D3-P34	D2	0.42		0.11
C2-P 1	C2	0.48	0.34	0.60	C2-P51	C2	0.58	0.34	0.41	D3-P35	D2	0.42	0.36	0.20
C2-P 2	C2	0.46		0.12	C2-P52	C2	0.10		0.33	E3-P 1	E3	0.54	0.42	0.62
C2-P 3	C2	1.42	1.11	0.23	C2-P53	C2	0.23	1.11	0.18	E3-P 2	E3	0.40	0.32	0.46
C2-P 4	C2	0.62		0.26	C3-P 1	C3	0.87		0.35	E3-P 3	E3	0.68		0.26
C2-P 5	C2	1.04	0.96	0.15	C3-P 2	C3	0.43	0.96	0.58	E3-P 4	E3	0.30	0.26	0.10
C2-P 6	C2	1.30	0.77	0.33	C3-P 3	C3	0.56	0.77	0.41	E3-P 5	E3	0.30		0.25
C2-P 7	C2	1.06	0.84	0.82	D2-P 1	D2	0.66	0.84	0.65	E3-P 6	E3	0.50	0.42	0.76
C2-P 8	C2	0.72	0.52	0.19	D2-P 2	D2	0.72	0.52	0.31	E3-P 7	E3	0.32	0.32	0.47
C2-P 9	C2	0.70	0.44	0.16	D2-P 3	D2	0.28	0.44	0.19	E3-P 8	E3	0.40	0.23	0.20
C2-P10	C2	0.52		0.15	D2-P 4	D2	0.53		0.29	E3-P 9	E3	0.46		0.15
C2-P11	C2	0.89	0.80	0.14	D2-P 5	D2	0.30	0.80	0.42	E3-P10	E3	0.32		0.21
C2-P12	C2	0.80	0.62	0.21	D2-P 6	D2	0.42	0.62	0.57	E3-P11	E3	0.35		0.16
C2-P13	C2	0.62		0.12	D2-P 7	D2	0.50		0.26	E3-P12	E3	0.34		0.18
C2-P14	C2	1.30	1.10	0.13	D2-P 8	D2	0.76	1.10	0.26	E3-P13	E3	0.90	0.60	0.11
C2-P15	C2	0.47		0.10	D3-P 1	D2	0.64		0.66	E3-P14	E3	0.73	0.32	0.06
C2-P16	C2	0.75	0.60	0.17	D3-P 2	D2	0.42	0.60	0.19					
C2-P17	C2	0.56	0.44	0.13	D3-P 3	D2	0.55	0.44	0.27					
C2-P18	C2	0.20		0.52	D3-P 4	D2	0.56		0.25					
C2-P19	C2	0.70	0.54	0.66	D3-P 5	D2	0.36	0.54	0.36					
C2-P20	C2	0.62	0.50	0.33	D3-P 6	D2	0.60	0.50	0.10					
C2-P21	C2	0.38	0.28	0.44	D3-P 7	D2	1.00	0.28	0.29					
C2-P22	C2	0.36		0.14	D3-P 8	D2	1.20		1.01					
C2-P23	C2	0.71	0.60	0.16	D3-P 9	D2	0.94	0.60	0.40					
C2-P24	C2	0.60	0.48	0.18	D3-P10	D2	1.00	0.48	0.31					
C2-P25	C2	1.04		0.16	D3-P11	D2	0.83		0.66					
C2-P26	C2	0.40		0.30	D3-P12	D2	0.44		0.63					
C2-P27	C2	0.34		0.13	D3-P13	D2	0.58		0.53					
C2-P28	C2	0.62		0.15	D3-P14	D2	0.36		0.10					
C2-P29	C2	0.80	0.38	0.28	D3-P15	D2	0.85	0.38	1.11					

5. 出土遺物

第1号土壙出土遺物 (第12図1~4)

土器片6点が出土している。

1は深鉢口縁部である。口唇部は軽微に肥厚して口端丸棟頭状を呈し、ゆるやかに内湾して、口端は内屈する。全体としてキャリバー状の器形を呈するものと思われる。両側になぞりを加えた微隆起線文によって文様が描かれる。口縁直下に無文部を持って、下端を横位の微隆起線文で区画し、胴部には血線的な微隆起線文が展開する。

内面には横位の研磨が観察される。胎土には若干の砂・小礫が混入され、焼成は良好である。

2は深鉢胴部破片である。両側に幅広の沈線に伴う隆帯によって渦巻文が描かれるものと思われる。地文はRL単節の縄文で、モチーフに沿って充填施文される。

胎土は極めて砂質で脆弱な器壁である。

3・4はいずれも縄文のみ施文される胴部破片である。RL単節の縄文が縦位回転で施文され、胎土は砂質で器壁はやや脆弱である。4はキャリバー形深鉢の胴部中段くびれ部分と考えられる。

1・2は加曾利EⅢ式~EⅣ式、3・4も同時期のものと考えられる。

第4号土壙出土遺物 (第12図5・6)

土器片4点が出土している。

5は深鉢口縁部である。口唇部が僅かに肥厚して、口唇断面は打ち削ぎ状を呈する。口端がやや強く内屈するものとみられ、キャリバー状の器形を呈するものと思われる。

両側になぞりを加えた微隆起線文によって文様が描かれる。口縁下にやや幅広の無文部を持ち、胴部との境を微隆起線で区画する。胴部には同様の微隆起線で文様が描かれ、一部が口縁下の微隆起線と一体化している。

地文はRL単節の縄文と考えられ、微隆起線の間線にもごく浅い施文が観察される。

口端および内面に横位の入念な研磨が観察される。胎土に小礫と砂粒を若干含む。焼成は良好である。

6は浅鉢の胴部と考えられる。頸部がくびれ、胴部中段がソロバン玉状に張り出す浅鉢と考えられる。張り出しの部分に、沈線によるなぞりを持つ2本一組の隆帯が巡り、これより上に文様帯を持つ。胴下半部は無文で、横位の研磨が徹底される。

内面は黒色で、横位の入念な研磨が観察される。胎土には小礫と若干の砂粒が混入される。焼成は良好である。

5は加曾利EⅣ式、6はやや古く加曾利EⅡ式期のものと考えられる。

第6号土壙出土遺物 (第12図7~10)

土器片9点のほか、石器2点が出土している。

第12図7は深鉢口縁部である。口縁部が軽微に肥厚して、口唇断面がやや打ち削ぎ状を呈する。全体としてゆるやかに内湾し、口端は僅かに内屈する。キャリバー状の器形を呈するものと思われる。

両側になぞりを加えた微隆起線文によって文様が描かれる。口縁下にやや幅広の無文部を持って、下端を横位の微隆起線文で区画する。胴部には微隆起線文による曲線的な磨消モチーフが配され、上端が口縁下の微隆起線文と一体化する。

地文はRL単節の縄文で、モチーフに沿って充填施文されている。内面に横位の研磨が施されるが、器面の風化が甚だしい。

胎土に多量の小礫・砂粒を含み、焼成はやや不良で、器壁は脆弱である。

8も同種の深鉢で、胴下半部の破片と考えられる。

両側になぞりを加えた微隆起線による磨消懸垂文が描かれる。

地文はRL単節の縄文で、概ね縦位回転で施文される。内面には横位のナデ調整が観察される。

胎土には多量の小礫・砂粒が混入される。焼成は比較的良好である。

9はやや小形の深鉢の胴部破片である。口縁下に文様帯を持ち、胴部に磨消懸垂文が垂下するキャリバー系の深鉢と考えられる。



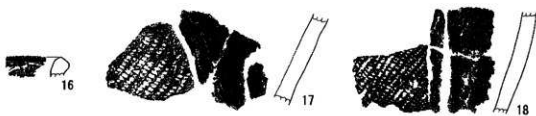
(SK1)



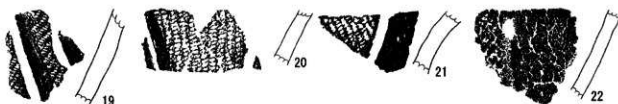
(SK4)



(SK6)



(C2-P2)



(C2-P23)



第12圖 遺構出土縄文土器

両側になぞりを加えた断面三角形の微隆起線で文様帯下端を区画し、ここから磨消懸垂文が垂下する。懸垂文の両側縁は沈線で描かれ、上端が逆U字に連繋して地文部を取り囲む。無文部の中央には蕨手状の沈線が垂下するものとみられる。

地文はR L単節の縄文で、縦位回転で施文される。胎土には多量の小礫と砂粒が混入し、器壁はやや脆弱だが焼成は悪くない。

10は同種の小形深鉢胴部で、やはり沈線による磨消懸垂文が描かれる。地文はL R単節の縄文で、縦位回転で施文される。胎土には少量の砂粒が混入される。焼成は比較的良好である。

7・8は加曾利EⅣ式、9・10は加曾利EⅢ式と考えられる。

第13図1はほぼ完形の打製石斧である。

機長の剥片を使用し、腹面に主要剥離面を残している。

背面に広く自然面を残す。剥離は刃部および右側縁に集中し、左側縁は敲打による抉りがみられる程度で、基部はほとんど無加工である。石材は砂岩を使用し、長さ9.7cm、最大幅4.7cm、最大厚1.8cmを測る。重量は79.0gである。

2は磨石である。

不正楕円形の自然礫を非整形で使用している。両面に使用面を持つが、より磨耗の進んだほうを表面とした。右下側縁を中心に敲打がみられ、敲石としての二次使用が考えられる。石材は閃緑花崗岩が使用されている。長径10.7cm、短径9.8cm、最大厚4.1cmを測る。重量は689.6gである。

SX-1 出土遺物 (第12図11~15)

土器片6点が出土している。

11は連弧文土器である。胴部中段付近の破片とみられるが、比較的ぐびれの弱い寸胴の器形と考えられる。やや浅く幅広の沈線で弧線文が描かれ、磨消はみられず、懸垂文等の付加文もみられない。地文はRの撚糸文で、縦位回転で施文されている。

胎土に少量の砂粒を混入し、焼成は良好。器壁は堅緻だが、内面は使用に伴う風化がみとめられる。

12はキャリバー系深鉢の胴部破片である。口縁部文様帯の下端を区画する隆帯から直下の部分の破片と考えられる。

隆帯に沿って幅広のなぞりが観察され、胴部にはL R単節縦位回転の縄文が施文される。胎土に若干の砂粒が混入され、焼成は良好である。

13も同種の深鉢の胴部と考えられる。

R L単節の縄文が縦位回転で施文される。縄文の施文単位の間隙には縦位のなぞりがみられ、懸垂文を構成するものと考えられる。

胎土には少量の砂とシルトが混入され、焼成は良好である。

14は浅鉢の口縁部である。頸部屈曲し、胴上半部に最大径を持つ胴張りの浅鉢である。

口縁がいちじく状に肥厚し、口端は平坦に成形されており、口唇断面角棒頭状を呈する。

頸部屈曲して幅広の沈線が巡り、胴部は丸く張り出す。文様はみられない。

内外面とも横位の研磨が徹底される。胎土には若干の砂粒が混入され、焼成は良好である。

15も浅鉢胴部と考えられる。胴部中段が「く」の字状に張り出すソロバン玉形の浅鉢と考えられる。胴上半部には半截竹管状工具による平行沈線文がみられる。内面には横位のナテ調整が観察される。

胎土には少量の砂が混入され、焼成は良好である。

いずれも加曾利EⅡないしEⅢ式と考えられる。

ピット出土遺物

C2-P2 出土遺物 (第12図16~18)

土器片3点が出土している。

16は深鉢口縁部である。口唇肥厚してわずかに外屈し、口端上は平坦に整形される。胎土に少量の砂粒を混入し、焼成は良好である。

17はやや大形の深鉢胴部である。両側になぞりを加えた微隆起線により、幅広の磨消モチーフが描かれる。地文はR L単節の縄文で、概ね縦位回転で施文される。胎土は砂質で、焼成は比較的良好だが、内面が広い範囲にわたって風化・剥落している。

18も同種の深鉢である。両側になぞりを加えた微隆起線により、磨消懸垂文が描かれる。無文部の中央に掌手状沈線が垂下する可能性がある。

地文はR L単節の縄文で、縦位回転で施文される。内面には横位のナデ調整が観察される。胎土は砂質で、焼成は比較的良好である。

いずれも加曾利E IV式と考えられる。

C2 - P 23出土遺物 (第12図19~22)

土器片4点が出土している。

19は深鉢胴上半部である。両側になぞりを加えた微隆起線により縦長の渦巻文が描かれるものとみられる。

地文はR L単節の縄文で、モチーフに沿って充填施文される。内面には横位の研磨が徹底される。

胎土はやや砂質で、焼成は比較的良好である。

20は同種の深鉢の胴部破片である。両側になぞりを加えた微隆起線により懸垂文が描かれるものとみられる。

地文はR L単節の縄文で、縦位回転で施文される。

内面には横位の研磨が観察される。胎土には若干の砂粒が混入され、焼成は良好である。

21は同種の深鉢の胴部破片である。両側になぞりを加えた微隆起線により曲線的な磨消モチーフが描かれるものとみられる。

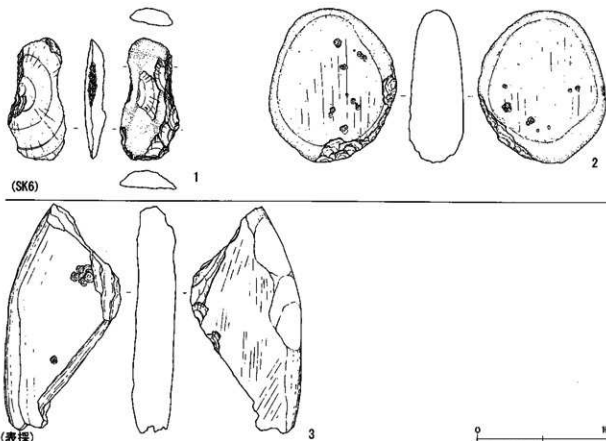
地文はR L単節の縄文で、この部分に関しては横位回転で施文されるが、モチーフに沿って充填施文された可能性がある。内面には横位の研磨が観察される。胎土には若干の砂粒が混入され、焼成は良好である。

22は同種の深鉢の胴部破片である。両側になぞりを加えた微隆起線により幅広い懸垂文が描かれるものとみられる。

地文はR L単節の縄文で、縦位回転で施文される。内面には横位の研磨が観察される。胎土には若干の砂粒が混入され、焼成は良好である。

内面に比較して外面の風化がはなはだしく、二次焼成の可能性はある。

いずれも加曾利E III~E IV式と考えられる。



第13図 出土石器実測図

グリッド出土遺物

土器 (第14図)

1は早期の条痕文土器である。口唇断面先細りで、口端が平坦に整形される。口端を除く内外全面に右下がりの条痕文が施文される。胎土はやや砂質で、少量の繊維が混入される。焼成は比較的良好である。

2は深鉢口縁部である。口唇断面内削ぎ状を呈する。外面が剥落し、文様は不明だが、中期末～後期初頭の可能性がある。内面に横位の研磨が施される。胎土に若干の砂・シルトが混入され、焼成は良好である。

3は加曾利EⅢ式の胴部であろう。断面台形の隆帯により曲線モチーフが描かれるもので、キャリバー系の深鉢の胴部に唐草文的なモチーフが採用されたものであろう。胎土に若干の砂粒が混入され、焼成は比較的良好である。

4はキャリバー系深鉢の頸部無文帯で、加曾利EⅠ～EⅢ式に伴うものであろう。胴部との境を断面台形の隆帯により区画する。頸部および内面には横位の研磨が徹底される。胎土に少量の砂粒が混入され、焼成は良好である。

5以下はいずれも加曾利EⅣ式で、一部に加曾利EⅢ式が含まれる。就中、5～18は両側になぞりを加えた微隆起線文によって磨消文様が描かれる深鉢である。

5は深鉢口縁部である。緩やかな波状口縁と見られ、口縁内湾し、口唇断面が内削ぎ状を呈する。

口縁直下に無文部を持って、下端を横位の微隆起線文で区画する。胴部には微隆起線文による逆U字状の磨消モチーフが描かれ、モチーフ上端が波頂部の無文帯へと貫入する。

地文はR L単節の縄文で、概ね縦位回転で施文される。無文部および内面は入念に研磨される。胎土に若干の砂粒が混入され、焼成は良好である。

6もこれに類似の口縁部破片である。やはり波状口縁をなすものとみられ、口唇は軽微に肥厚して、断面丸棒頭状を呈する。口縁部の無文帯と胴部との境は、上下に幅広の凹線を伴う断面台形の隆帯によって区画される。胴部文様は逆U字状の磨消モチーフで、断面

三角形の微隆起線文によって描かれる。

地文はR L単節の縄文で、モチーフに沿って充填施文されている。胎土に少量の砂粒を混入する。焼成は良好である。

7は胴部中段の破片である。縄文を充填するJ字・逆U字形の区画が上下に対向するものと思われる。地文はR L単節の縄文で、縦位回転で施文される。内面には縦位方向の研磨が施される。胎土に若干の砂粒を混入し、焼成は良好である。

8も胴部中段で、強い外反のカーブを描く。地文はR L単節の縄文で、縦位回転で施文される。内面には横位の研磨が施される。胎土に若干の砂粒を混入し、焼成は良好である。

9は胴下半部であろう。中段の括れ直下の部分が強く張り出しており、瓢状の器形を呈する可能性もある。微隆起線による磨消懸垂文が描かれる。地文はR L単節の縄文で、器面のカーブに沿ってランダムに施文される。内面には横位の研磨が施される。胎土に若干の砂粒が混入され、焼成は良好である。

10は7と同様、胴部中段で、上下対向するモチーフの接点である。地文はR L単節の縄文で、縦位回転で施文される。内面に横位の入念な研磨が施されるが、外面は風化が著しい。胎土に若干の砂粒が混入され、焼成は良好である。

11は胴上半部である。地文はR L単節の縄文で、縦位に整然と施文される。内面には縦横の研磨が交錯する。胎土に若干の砂粒が混入され、焼成は良好である。

12は部位不明の胴部破片である。地文はR L単節の縄文で、モチーフに沿って施文される。内面には横位の研磨が徹底される。胎土はややシルト質で、焼成は良好である。

13は胴上半部であろう。地文はR L単節の縄文で、モチーフに沿ってランダムに施文される。内面には横位の研磨が施される。胎土に若干の砂粒が混入され、焼成は良好である。

14は胴上半部である。内部に縄文を充填する楕円形の区画の上端部分と考えられる。地文はR L単節の

縄文で、モチーフに沿ってランダムに施文される。内面には縦横の研磨が交錯する。胎土はややシルト質で、焼成は良好である。

15は部位不明の胴部片である。地文はR L単節の縄文で、縦位に整然と施文される。内面には縦横の研磨が交錯する。胎土に若干の砂粒が混入され、焼成は良好である。

16は胴上半部で、楕円形区画の上部と考えられる。地文はR L単節の縄文で、モチーフに沿って施文される。内外面とも器面の風化が著しい。胎土に多量の砂・シルトが混入され、焼成は比較的不良である。

17は内部を磨消した2本一組の微隆起線文で描かれる逆J字のモチーフの先端部と考えられる。地文はR L単節の縄文で、モチーフに沿ってランダムに施文される。内面には横位の入念な研磨が施されるが、外面は風化が甚だしい。胎土に若干の砂粒が混入し、焼成は比較的良好である。

18も同種のモチーフである。地文はR L単節の縄文で、モチーフに沿ってランダムに施文される。内面には横位の入念な研磨が施される。胎土はややシルト質で、焼成は比較的良好である。

19～21は沈線による磨消モチーフの深鉢である。

19は口縁部である。やや外反しつつ直行する水平口縁とみられ、口唇断面丸棒頭状を呈する。

内部に縄文を充填する楕円ないし逆U字の区画が、口縁直下まで延びて配置される。地文はR L単節の縄文で、縦位回転で施文されている。内面には横位の研磨が施され、口端部は何段階かに面取りされている。

胎土に多量の砂粒とシルトが混入され、焼成は比較的良好である。

20は部位不明の胴部破片である。磨消懸垂文が描かれ、地文はR L単節の縄文で、縦位回転で施文される。内面は縦横の研磨が交錯する。胎土はやや砂質で、焼成は比較的良好である。

21も部位不明の胴部破片である。磨消懸垂文が描かれ、地文はR L単節の縄文で、モチーフに沿って施文される。内面は横位の研磨が施される。胎土はやや

砂質で、焼成は比較的良好である。

22も部位不明の胴部破片で、きわめて厚手の器種である。器表面の風化と剥落が甚だしいが、磨消懸垂文が描かれるものとみられる。地文はR L単節の縄文で、縦位回転で施文される。胎土に多量の砂粒とシルトが混入され、焼成はやや不良である。

23は小形の深鉢胴部と考えられる。部位は不明である。磨消懸垂文が描かれ、地文はR L単節の縄文で、縦位回転で施文される。内面には横位の研磨が施される。胎土に少量の砂粒が混入され、焼成は良好である。

24は両耳壺の胴部と考えられる。胴部中段に最大径を持ち、頸部屈曲して外反する器形で、胴上半部に深鉢口縁部文様帯ゆずりの区画文を持ち、一对の橋梁状把手が配されるものである。本資料は胴上半部から中段にかけての区画部分である。断面三角形の微隆起線によって楕円形の区画文が描かれ、内部にR L単節の縄文が横位回転で施文される。区画文から下には櫛歯状工具による条線文が縦位に施文される。胴上半部の文様帯の形態化が進んでおり、この器種としては比較的新しい段階のものと考えられる。

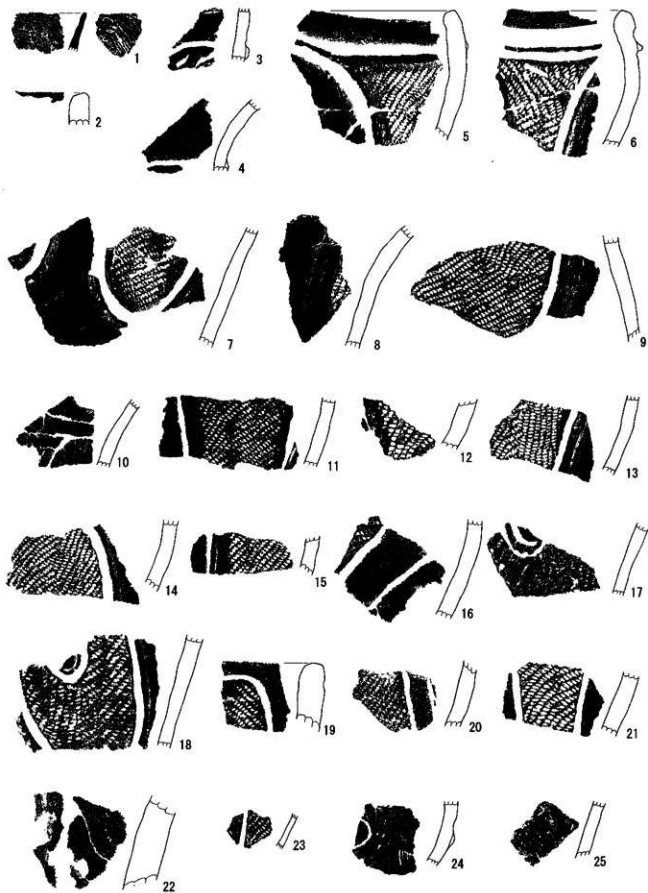
内面には篋状工具先端を用いた斜位の研磨が観察される。胎土はやや砂質で、焼成は良好である。

25は部位不明の胴部で、無文ないし磨消モチーフの無文部の可能性もある。外面には斜位のナデ調整が、内面には横位の研磨が観察される。胎土はやや砂質で、焼成は良好である。

石器 (第13図3)

表面採集の石皿片である。扁平な凝灰岩の円礫を未整形のまま使用したものとみられ、全体の1/4程度が残存している。明確な凹部を形成せず、平坦な一面のみを磨り面として使用している。裏面には台石として二次使用した痕跡がみられる。また、破碎後の被熱による赤化が観察され、炉石等の二次使用が考えられる。

長径17.1cm・短径8.8cm・最大厚2.9cmを測る。重量は549.2gである。



第14図 グリッド出土縄文土器

V 調査のまとめ

今回の調査では、伊勢の台遺跡からは、縄文時代の土壌12基、不明遺構1基、ピット130基・溝跡1条が検出され、縄文時代早期から中期の土器が出土した。

伊勢の台遺跡は、遺跡の範囲が4万㎡にも及ぶ広大な面積の遺跡で、これまでに9世紀中ごろの堅穴住居跡2件が調査されている。(塩野博他1991)

調査区は、遺跡の範囲の南西端に位置し、道路幅の調査ということもあり、幅3～7m、長さ50mの細長い調査区であった。このため、検出遺構の多くは調査区外へ展開していたため、遺構の全体が把握できたものは少ない。

検出した土壌からは、第1・4～6号土壌から縄文時代中期後半の土器が出土し、他の土壌については、覆土観察の結果、全て縄文時代に属するものと判断した。

ピットは、調査区のほぼ全域にわたって検出されたが、調査区の中央付近を境に、北側では時期不明の比較的浅いピットが、南側では縄文土器の出土するピットが検出されたが、明確な時期を明らかにすることはできなかった。特に、D-3グリッドを中心に、縄文土器を出土するピットが集中していた。

また、ピットには、断面観察によって、柱痕跡が確認できるものがあり、明らかに柱穴と考えられるピットが数基検出された。

これらは、床面、炉跡が失われた堅穴住居跡・掘立柱建物跡の建物遺構の柱穴の可能性もあったが、ピット群の配置に規則性はなく、建物遺構に伴うものかどうかは判断できなかった。

溝跡は1条検出された。調査区の北側を、東西方向に横断する形で検出された。溝の両端は、調査区外に及んでいたため、遺構の全体像は明らかにできなかった。

溝跡からは、遺物は出土せず、遺構の所属時期については明らかにできなかった。

なお、1/2500都市計画図を観察すると、現地表面の溝跡に相当する位置に、畑の境界線が描かれており、第1号溝跡は、近世以降の区画溝であった可能性も有る。

不明遺構は、東西11m、南北16mの範囲で約0.2m落ち込んでいた。縄文土器が出土し、当初は、堅穴住居跡を想定した調査を行ったが、平面の形状が不整形で、炉跡や柱穴などの付属施設等が検出できなかったことから、不明遺構(SX)と呼称した。

出土遺物は、縄文時代中期を中心とした土器片が、土壌・ピット・不明遺構・グリッドから出土した。

また、早期の条痕文系土器が僅かではあるがグリッドから出土した。

縄文時代早期の遺跡は、本遺跡と同じ都幾川右岸の日野原遺跡(石岡他1982)、左岸では地家遺跡(石川1996)・根際遺跡(黒坂1998)。春日山・物見山付近の山地部では笹山・寒風・楡沢東・北山遺跡などから、熱糸文系・押型文系・沈線文系土器が出土しており、寝殿遺跡では、早期の炉穴群が検出され、本遺跡でも、遺構が存在していた可能性はある。

中期の遺跡は、都幾川右岸では、伊勢の台遺跡、狐塚遺跡(小野1991)・原遺跡(小野1989)・日野原遺跡で加曾利E期の遺構・遺物が検出されている。

また、本遺跡から都幾川上流の江光山遺跡(梅沢1980)では、中期後半の環状に分布する土壌群が検出された。

都幾川左岸では、地家遺跡で勝坂期～加曾利E期にかけての住居跡が調査されている(小野1990a・石川1996)。

今回の調査では、遺構・グリッドからは、縄文早期・中期の土器が出土したが、堅穴住居・炉穴等の生活跡を検出することはできなかった。

今回の調査地点は、遺跡の範囲の南西端ということもあり、集落の中心は、今回調査地点よりも北東方向にあったものと考えられる。

引用・参考文献

- 石岡憲雄他 1982 『日野原遺跡』玉川村日野原遺跡調査会
- 石川安司 1993 『小倉・山王山遺跡Ⅰ』玉川村埋蔵文化財調査報告第8集 玉川村教育委員会
- 石川安司 1994 a 『玉川村の古代瓦—亀の原窯跡群・綿新田遺跡を中心に—』『埼玉県北西部地域考古資料集成③』埼玉県比企都市考古学談話会
- 石川安司 1994 b 『春日神社境内遺跡』玉川村村史調査報告第5集 玉川村教育委員会
- 石川安司 1995 『節新田遺跡Ⅱ』玉川村埋蔵文化財調査報告第9集 玉川村節新田遺跡調査会 玉川村教育委員会
- 石川安司 1996 『地家遺跡Ⅱ』玉川村埋蔵文化財調査報告第10集 玉川村遺跡調査会 玉川村教育委員会
- 石川安司 1997 『長久保遺跡』玉川村埋蔵文化財調査報告第11集 玉川村遺跡調査会 玉川村教育委員会
- 井上 肇・小倉均 1998 『都幾川村史資料2 考古資料編』都幾川村
- 植木 弘 1995 「玉川村寒風遺跡出土の獣面裝飾付土器」『比企丘陵』創刊号 比企丘陵文化研究会
- 梅沢太久夫 1978 『八幡遺跡』都幾川村教育委員会
- 梅沢太久夫 1980 『江光山』考古学資料刊行会
- 梅沢太久夫他 1983 『嵐山町史』嵐山町
- 小野安司 1989 『原・狐塚遺跡Ⅰ』玉川村埋蔵文化財調査報告第3集 玉川村遺跡調査会 玉川村教育委員会
- 小野安司 1990 a 『地家遺跡Ⅰ』玉川村埋蔵文化財調査報告第4集 玉川村遺跡調査会 玉川村教育委員会
- 小野安司 1990 b 『玉川村遺跡群Ⅱ』玉川村埋蔵文化財調査報告第5集 玉川村教育委員会
- 小野安司 1991 『狐塚遺跡Ⅱ』玉川村埋蔵文化財調査報告第6集 玉川村教育委員会
- 小野安司 1992 『節新田遺跡Ⅰ』玉川村埋蔵文化財調査報告第7集 玉川村遺跡調査会 玉川村教育委員会
- 金子直行他 1982 『衆生ヶ谷戸』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第12集
- 黒坂植二 1998 『根際遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第208集
- 坂詰秀一 1964 「埼玉県中野原における敷石遺跡」『古代文化』第6巻3号 日本古代文化学会
- 笹森健一 1981 「縄文時代前期の住居と集落（Ⅰ）」『土曜考古』第3号 土曜考古学研究会
- 塩野 博・吉田哲夫・小野安司 1991 『玉川村史』通史編 玉川村
- 根岸茂夫・利根川宇平 1991 『玉川村史』通史編 玉川村
- 細田 啓・宮崎朝雄 1996 「玉川村寒風遺跡出土の踏碇C式土器」『比企丘陵』第2号 比企丘陵文化研究会
- 本間清利 1980 『角川日本地名大辞典11埼玉児』角川書店
- 宮崎朝雄 1995 「比企丘陵における縄文前期終末～中期初頭の土器群」『比企丘陵』創刊号 比企丘陵文化研究会

写真図版



調査区全景 (北から)



調査区全景 (南から)



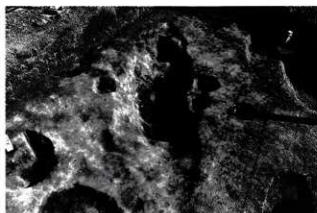
調査区北端全景



調査区南端全景



C-2・D-3グリッド全景



第1号土坑



第2号土坑・D3-P15



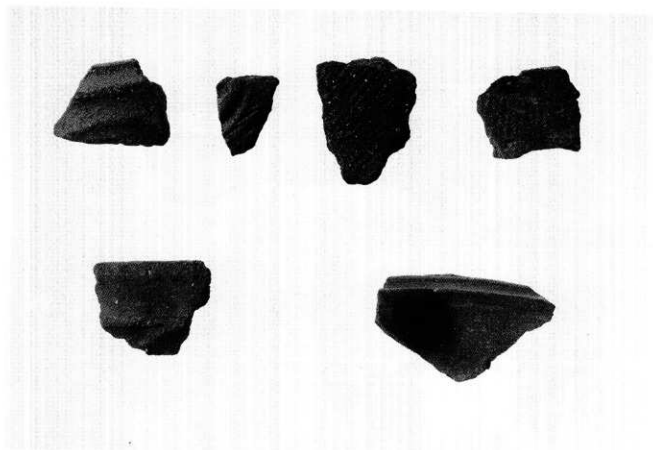
第4号土坑



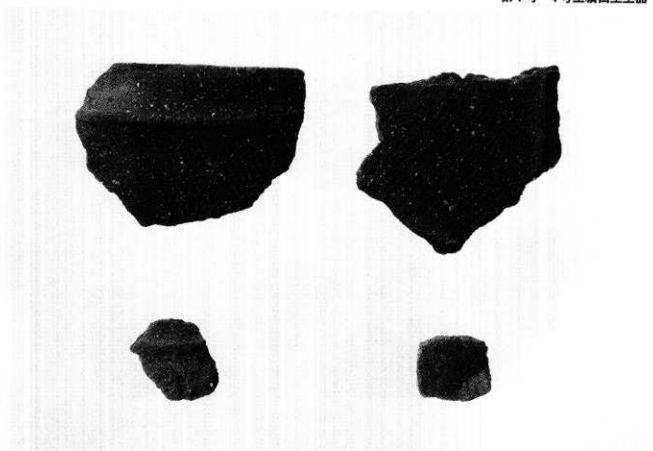
第6号土坑



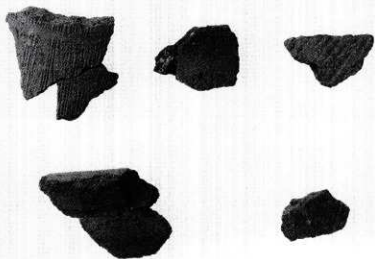
第1号溝跡



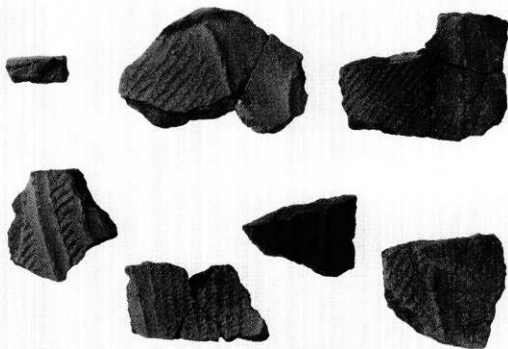
第1号·4号土壙出土土器



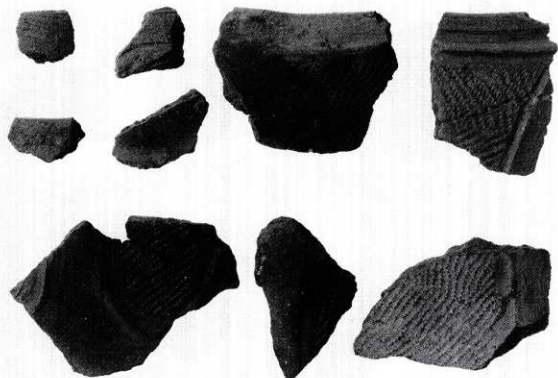
第6号土壙出土土器



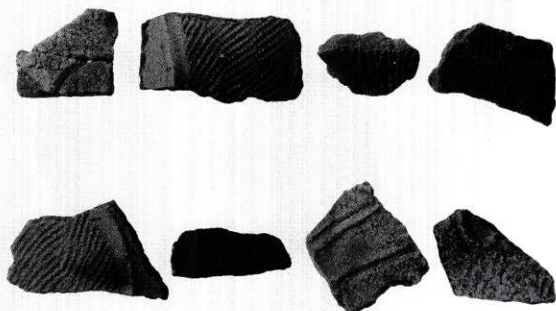
第1号性格不明遺構出土土器



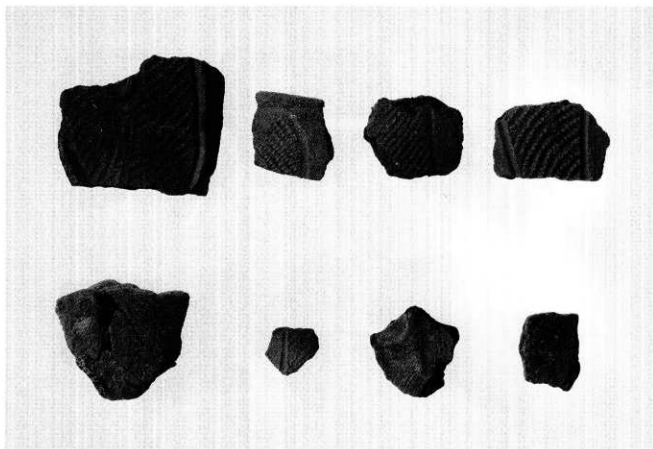
C2-P2・P23出土土器



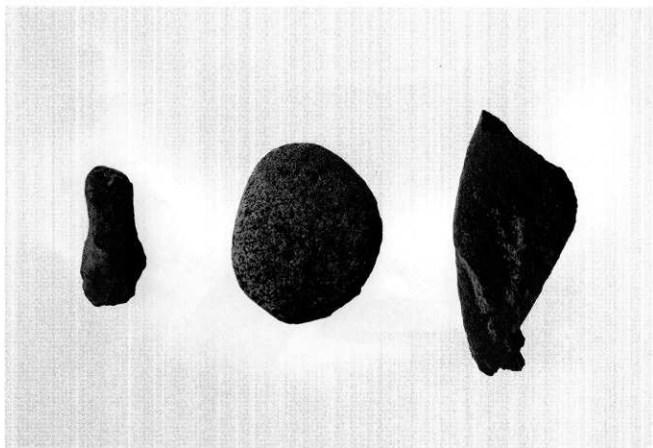
グリッド出土土器 (第14図1~9)



グリッド出土土器 (第14図10~17)



グリッド出土土器 (第14図18~25)



出土石器 (第13図)

報告書抄録

ふりがな	いせのだいせいせき							
書名	伊勢の台遺跡							
副書名	県道玉川坂戸線建設工事事業関係埋蔵文化財調査報告							
巻次								
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書							
シリーズ番号	第311集							
編著者名	栗岡 潤・渡辺清志							
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒369-0108 埼玉県大里郡大里町船木台4丁目4番地1 TEL 0493-39-3955							
発行年月日	西暦2005(平成17)年3月24日							
所取遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
伊勢の台遺跡	埼玉県比企郡玉川村大字玉川字伊勢の台1116-1他	11345	41-019	36° 00′ 21″	139° 18′ 19″	20030212 ～ 20030327	300	道路建設
所取遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
伊勢の台遺跡	集落跡	縄文他		土壇 12基 溝跡 1条 ピット 130基		縄文土器 石器		

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第311集

比企郡玉川村

伊勢の台遺跡

県道玉川坂戸線建設工事事業関係埋蔵文化財調査報告

平成17年3月14日 印刷

平成17年3月25日 発行

発行／ 埼 玉 県

財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 埼玉県入里郡大里町船木台4丁目4番地1

電話 0493(39)3955

印刷／株式会社太陽美術